

彩の歳時記

平成二十八年 十一月

玄冬十一月 良寛

玄冬十一月 雨雪正霏霏

千山同一色 萬徑人行稀

昔遊總作夢 草門深掩扉

終夜燒槽榼 靜讀古人詩

玄冬十一月、雨雪正に霏霏（ひひ）たり。千山同一の色、万径人の行くこと稀なり。昔遊総て夢と作り、草門深く扉を掩ふ。終夜槽榼を焼きて、静かに古人の詩を読む。

気温が低くなり、冬が近づいた事を実感する十一月、この時期、繁華街や大型施設での気が早いようなクリスマス仕様は、釣瓶落しのように日が落ちる夕暮

の寂寥感を心なしか暖かくしてくれようです。今は

古人のように、冬に向かう寂しさを景色から身に沁みて感じることも少なくなりましたが

日脚の短さには慌しさを覚えます。日中は澄んだ青空が綺麗な季節、銀色に輝く銀杏

深紅の紅葉など、戸外に出て、公園などで緑り広げられるイベントなどを手軽に楽しみたいものです。

十一月の暦

霜月「霜が降る月」

一日 炉開き 茶人の家では、この日か、亥の日(今年は一日)に風炉をやめ、炉を使い始める。

「柚子の実の色付くころに炉を開く」利休



二日 白秋忌

今も語り継がれる作品を数多く残した近代詩人・北原白秋【1885～1942】の忌日。

故郷柳川(福岡県)を「水郷柳河こそは我詩歌の母体である」と語る。熊本生まれ。

育った柳川に江戸時代から続く海山物問屋の実家が記念館として現存。詩集『邪宗門』

『思ひ出』など。童謡・唱歌「この道」「あめふり」「待ちぼうけ」「からたちの花」他。



三日 文化の日 明治節(明治天皇の誕生日)と1946年の日本国憲法公布日、48年の施行日で国民の休日。

皇居で文化勲章の授与式、前後日に文化庁主催の芸術祭が開催。

十一日 酒(市)の一(酒) 全国各地の大鳥神社の新年を迎える年中行事。浅草鷲神社が最も賑わうのは

江戸時代、吉原遊廓が控えていた名残。取手・「かつこめ」は福を「かつこむ」「とりこむ」

などの縁起物。

春をまつことのはじめや酒の市 宝井其角



七日 立冬【二十四節気】

この日より立春の前日(節分)までが暦上の冬。

十五日 七五三 七歳、五歳、三歳の子どもの成長を祝う年中行事。乳児の死亡率が昔は七歳まで育つ事が

珍しく、七歳まで育ったことを祝った。徳川綱吉の子、徳松の祝事の日に由来。明治になり現代の

七五三として定着。三歳の男女が髪をのばしはじめる「髪置き」、五歳の男子がはじめて袴

つける「袴着」、七歳の女子が帯をはじめる「帯解き」に由来。



二十二日 小雪【二十四節気】 木々の葉は落ち、平地にも初雪が舞い始める頃。

二十三日 勤労感謝の日 元は、作物の収穫に感謝する新嘗祭(いなめきい)。

二の酉 今年は一葉忌「新嘗祭」が重なるため、多くの人が予想される。

一葉忌 小説家・樋口一葉【1872～1896】120年目の忌日。近代女流作家の嚆矢。



近代女性初の紙幣肖像に。二十四歳で夭折。代表作「たけくらべ」の十四段「此年三の酉まで有りて中

略 上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく、中略、若人達の勢ひとては、天柱くだけ、地維(ちい)

かくるか、・」に当時の賑わいを窺える。他に「にぎりえ」「大晦日」など。

たけくらべの舞台、台東区竜泉の「一葉記念館」で催事がある。

十一月の歌

揺籃の歌

詞 北原白秋

曲 草川信

大人が聴いても心安らぐ名曲。1921年に『小学女生』発表。ゆったりと静かな

時が流れる中で、安らかに眠る我が子を愛しげに見つめる母親の姿が目につかぶ。

2007年(平成19年)に日本百歌選に。作曲の草川信【1893～1948】は

他に「ああ夕焼け小焼け」「どこかで春が」など。白秋の故郷・柳川では

毎日午後六時に市内に防災スピーカーからこの歌が流れる。



揺籃のうたをカナリヤが歌うよ

◆ねんねこ ねんねこねんねこよ

揺籃のうえに枇杷の実が揺れるよ

◆ねんねこ ねんねこねんねこよ

揺籃のつなを木ねずみが揺するよ

◆ねんねこ ねんねこねんねこよ

揺籃のゆめに黄色い月がかかるよ

◆ねんねこ ねんねこねんねこよ